

★ディスカッショナリスト プロフィール★

森下 隆(もりした・たかし)

1950年生。1972年よりアスペスト館の舞台制作に携わる。早稲田大学文学研究科前期課程修了後、出版社に勤務。土方昇の死後、土方昇記念資料館の設立と運営に参画。土方昇をめぐる展覧会やシンポジウム等の企画・構成を行う。現在、慶應義塾大学アート・センターに設置されている土方昇アーカイブを運営。慶應義塾大学文学部非常勤講師。NPO法人舞踏創造資源代表理事。

ドゥ ヴォス パトリック

1955年コンゴ生。ベルギー国籍。フランス国立東洋語東洋文化研究所卒業。92年に東京大学超域文化科学表象文化論専攻に就任、現在に至る。専門は演劇論、フランス演劇、日本の近現代舞台芸術79年～81年早稲田大学教授都司正勝先生の指導の下で2年間歌舞伎研究に従事。研究業績(歌舞伎、日本の近代演劇、演劇理論)は殆どフランス語による。翻訳もある(大江健三郎、谷崎潤一郎、武内好、井上ひさし、野坂昭如、村上春樹の作品など)土方についての研究は今のところフランス語による論文3本や『美貌の青空』のいくつかの文章に限る。

渡邊守章(わたなべ・もりあき)

1933年生。東京大学教授、放送大学副学長、パリ第三大学客員教授等を経て東京大学名誉教授、京都造形芸術大学教授、舞台芸術研究センター所長。専攻は仏文学・表象文化論。演出家。演劇企画「空中庭園」主宰。著書に『ボーラー・クロードルー劇の想像力の世界』『虚構の身体』『哲学の舞台』(M・フーコーとの共著)、『舞台芸術の現在』、等。訳書に『ラシーヌ『フェードル アンドロマック』ブルタニキュス ベレニス』、フーコー『性的歴史 I ～知への意思』、クロードル『鏡子の靴』(上・下、毎日出版文化賞、日本翻訳文化賞、小西財団日仏翻訳文学賞受賞)、バルト『ラシーヌ論』(読売文学賞受賞)等。演出作品に、ラシーヌ『悲劇フェードル』(芸術祭優秀作品賞)、クロードル『真昼に分かつ』、ミュッセ『ロレンザッショ』、ジュネ『女中たち』(読売演劇賞)、東鏡花『天守物語』等。能・狂言等の日本の伝統演劇にも詳しく、能ジャンクション『葵上』『當麻』を、またクロードルの詩による創作能『内濠十二景』、あるいは『二重の影』『薔薇の名一長谷寺の牡丹』を作・演出。

宇野邦一(うの・くにいち)

1948年生。京都大学、パリ第8大学で学び、思想・芸術・文学を横断する批評、ドゥラーズ、アルトー、ベケットなどの翻訳が主な活動。立教大学映像身体学科教授として、演劇、ダンス、映画などの創作・批評の基礎になる身体論、身体哲学を模索する。主な著書に『アルトー 思考と身体』(白水社)、『ドゥラーズ流動の哲学』(講談社)、『ジャン・ジュネ』(以文社)、『破局と渦の考察』(岩波書店)、『〈単なる生〉の哲学』(平凡社)など。

國吉和子(くによし・かずこ)

舞踊研究・評論。多摩美術大学客員教授、早稲田大学、立教大学などで舞踊理論、身体文化論、パフォーミング・アーツ史の講義を担当。著書に『夢の衣装、記憶の臺 舞踊とモダニズム』、編著に『見ることの距離』(市川雅道稿集)。

赤坂憲雄(あかさか・のりお)

1953年東京都生。東京大学文学部卒業。東北文化研究センター設立後、99年より第1期『東北学』(作品社)、第2期『季刊東北学』(柏書房)を刊行しつつ、東北から日本を開くための知の運動を展開している。主な著書に『異人論序説』『排除の現象学』(ちくま学芸文庫)、『境界の発生』『子守唄の誕生』(講談社学術文庫)、『東北学』(三部作)、『柳田国男の発生』(三部作)、『東西・南北考』(岩波新書)、『岡本太郎の見た日本』(岩波書店)、『東北知の鉱脈』(荒蝦夷)など。東北芸術工科大学大学院長。

田中弘二(たなか・こうじ)

1955年生。金沢大学在学中に土方昇構成作品『埃を浴びた蝶のような男』(金沢舞踏館公演)に出演参加。パキスタンでのイスラーム研究、インドでの仏教研究を経て舞踏の表現に関わるにいたる。2003年より土方昇研究を始める。(土方昇研究・舞踏の欲望)をWEBにて公開中→<http://vratya.blogspot.com/>

三浦基(みうら・もとい)

演出家。劇団「地点」代表。1999年より2年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリに滞在する。2007年チエホフ作『桜の園』により文化庁芸術祭賞新人賞受賞。2008年度京都市芸術文化特別奨励者。京都造形芸術大学非常勤講師。

八角聰仁(やすみ・あきひと)

1963年生。批評家。近畿大学文芸学部教授。京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員、および同センター発行の機関誌『舞台芸術』編集委員。演劇、ダンス、写真、映画、文学などに関する論考多数。編著に『現代写真のリアリティ』(角川学芸出版)ほか。

森山直人(もりやま・なおと)

1968年東京生。演劇批評、現代演劇論、表象文化論。京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授、同大学舞台芸術研究センター主任研究員、および同センター発行の機関誌『舞台芸術』編集委員。京都芸術センター主催事業「演劇計画」企画ブレーン(2004～)。論文に、「過渡期としての舞台空間・小劇場演劇における「昭和30年代」」、「ドキュメンタリー」が切り開く(舞台)」、「分断と共感・東京国際芸術祭「中東演劇シリーズ」を振り返って」等。

山田せつ子(やまだ・せつこ)

明治大學演劇学科在学中、笠井義の主宰する舞踏研究所「天使館」に入館。独立後ソロダンスを中心に独自のダンスの世界を展開し、国内外での公演も多数行い、日本のコンテンポラリーダンスのさきがけとなる。1989年よりダンスカンパニー一杣系を主宰、『翔ぶ娘』『愛情十八番』などの作品を発表。2000年より京都造形芸術大学 映像・舞台芸術学科教授として8年間ダンスの授業を持ち2009年より客員教授。最近の作品『奇妙な孤獨』『ふたりいて』など。ダンス・演劇などのジャンルを超えて新しい作品創りを始めている。著書『速度ノ花』(五柳書院)。舞台芸術研究センター主任研究員。

★予約・申し込み★

参加ご希望の方は下記予約先まで
「氏名、希望予約数、連絡先」を
お知らせの上、お申し込み下さい。

京都芸術劇場 チケットセンター

TEL075-791-8240
(平日10:00～17:00)

★交通アクセス★

京都造形芸術大学
〒606-8271
京都市左京区北白川瓜生山2-116

■JR「京都」駅、京阪「三条」駅、
阪急「河原町」駅から
一京都市バス5番「岩倉」行き乗車、
「上総町・京都造形芸大前」下車
(京都駅から約50分)

■京都市営地下鉄「丸太町」「北大路」駅
から
一京都市バス204循環に乗車、
「上総町・京都造形芸大前」下車
(約15分)

■京阪電鉄「出町柳」駅から
一叡山電車に乗り換え、「茶山」駅下車、
徒歩10分
→タクシー10分

■当劇場に駐車場はございません。



主催・開会式

京都造形芸術大学
舞台芸術研究センター

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116
TEL 075-791-9497 FAX 075-791-9498
E-mail: katse@seiryoji.kcg.ac.jp

京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター主催 研究会 ダンス研究と実験VOL.2 2009

土方昇

～言葉と身体をめぐって

2009年11月14日(土)14:00～(13:30受付)

京都造形芸術大学 studio21

無料 (定員100名／予約優先)

公開研究会

★第一部：基調発表 14:00～

1) 森下 隆「土方舞踏のマトリクス、あるいはクリエイション」
関連上映『土の土方像と水滴の時間』
(撮影・編集: 亀村佳宏 2008～2009)

2) ドゥ ヴォス パトリック「土方昇を翻訳することが可能か」
関連上映『La Danseuse Malade(病める舞姫)』(予定)
(振付: ポリス・シャルマツ/2008)の上演記録より

3) 渡邊 守章「土着性とジェンダー」

～休憩～ 15:45～16:15

★第二部：ディスカッション 16:15～19:00

パネリスト: 森下 隆(慶應義塾大学文学部非常勤講師、NPO法人舞踏創造資源代表理事)

ドゥ ヴォス パトリック(東京大学教授、フランス演劇・舞台芸術理論)

渡邊 守章(京都造形芸術大学教授、仏文学・表象文化論、演出)

宇野 邦一(立教大学教授、フランス文学・思想)

赤坂 憲雄(東北芸術工科大学大学院長、民俗学)

國吉 和子(多摩美術大学客員教授、舞踊研究・批評)

田中 弘二(土方昇研究)

三浦 基(演出・地点代表)

八角 聰仁(近畿大学教授、批評)

森山 直人(京都造形芸術大学准教授、演劇批評)

山田 せつ子(京都造形芸術大学客員教授、コレオグラファー・ダンサー)

土方巽～言葉と身体をめぐって 第一回研究会報告

土方さんに触りにいく

山田せつ子

毎日グラフ1969年2月2日号、表紙は東大安田講堂の前に立つ機動隊装甲車の写真。見出しへ「東大・安田トリデの攻防」とある。120円だ。ページをめくれば、東大安田講堂での全共闘と機動隊の衝突の写真、そしてさらにページを繰っていくとそこに秋田の野原で停む、あるいは走り抜ける土方巽の大写しの舞踏写真とインタビューが掲載されている。

土方巽の舞踏を実際に目撃したことのある人はすでに数少ない。私もかろうじて『四季のための二十七晩』静かな家とその後の振り付け作品だけだ。強烈であってもすでに記憶は断片化している。伝説の『禁色』も『肉体の叛乱』も見ていない。土方巽はすでに『疱瘡譚』などの数少ない映像や、録音された声「慈悲心鳥がバサバサと骨の羽を抜けてくる」そして、書かれた言葉で辿るしかない。土方さんは遠い。しかし、6月20日の会を終え、この距離を良い距離にできるだろうと思えた。

田中さん、國吉さん、宇野さんそれぞれの視点から土方巽へのアプローチがあり、そこには同様にそれの方の佇まいがあった。続く対話で松田さん、三浦さんの戸惑いを含んだ率直な感想が、場所の空気を搅拌し、土方巽をめぐる星座表を更に複雑にしていった。時間が短かく、それぞれの方の発言が彗星のように尾を曳きながらも、光が混ざり合うところまでは届かなかつたかと思う。次回以降は、ラウンドテーブルの形をとり、多くの交叉が生まれるようにしたい。また、映像はゲストスピーカーの方々に選んでいただき、それに沿って話を進めていただくようにした。

9月から立ち上げたWebページでは、ゲストスピーカーの方々に、話された内容に更に加筆していただいて載せている。そのため、それ

ぞれのタイトルに変更が出ている。また、ディスカッションで会場からご発言いただいた方の言葉も載せていただいている。

今後、ここに研究会に参加した方の寄稿も載せていただいたらと思う。

思考錯誤のプロセス、次回多くの皆様のご参加をお待ちしたい。

◎

「歴史」の正体を覗き見ること

— 研究会に参加する理由

森山直人

第一回の研究会におけるシンポジウムの席上で、パネリストのひとりとして参加していた演出家の三浦基氏は、「土方巽のことを知らない、とは絶対に口にしないつもりでここに来た」と言われた。私は三浦氏よりもやや年上だが、私自身は、「土方巽のことを何も知らない」と告白するところからしか、やはり出発できないと感じている。残念ながら、私も土方巽をライブで体験した世代には属していない。私は三浦氏と違って秋田出身者でもないし、文字通り遺された映像やテキストでしかHIJIKATA TATSUMIという存在を触知できない。けれども、たとえば彼自身の『疱瘡譚』における、まるで枯草のような身体の存在感に映像を通して触れてみたり(衰弱体、という言葉をはじめて知ったときの衝撃はいまなお忘れない)、あるいは、『病める舞姫』という言葉で書かれたシュルレアリストイックなイメージの仮縫じの手帳のようなテキストの、それ自体が難解だというよりも、むしろひとつだと思っていた道がいつのまにか踏みしめる端から幾重にも分岐し、次の一步をどこに踏み降ろしていくのかわからなくなり途方に暮れるという体験に、思い切って身を晒してみたりしたとき、そこで

出会う言葉や身体が、他のどんな場所でも味わうことのできない種類のものであることに心底驚くことを通じてのみ、いまのところ、辛うじて土方巽の遺産と私自身とが具体的に繋がっている、ということだけは言える。できることなら、私はやはり土方巽をこの目で見てみたかった。それがかなわぬ今、土方巽の、「私は舞台に立っている時も全部自分の体を覗いているんですよ」(『舞踏行脚』)というときの「覗いている」という言葉の意味を想像しながら、映像やテキストを通して、せめてHIJIKATAを「覗いてみる」ことはできないだろうか、と思っている。

私が生まれたのは1968年であり、伝説となつた『肉体の叛乱』が上演された年にあたる。もちろんそんなことはたんなる偶然にすぎない。けれども、私が生まれた「1968年」という年号が、私自身に対して、絶えず軽い眩暈のような異和感を喚起しつづけているだけはたしかである。たぶん私は、「1968年」という数字が喚起するさまざまなイメージの多くが、いまもって、あまり好きになれないでいる(たとえば、私は瀧澤龍彦の写真で見るあのたたずまいがなぜか大嫌いである)。けれども同時に、この時代の芸術作品が、いまだに、ある質量をもつた「問い」としてこちらに迫ってくること、そのときの新鮮な魅力を否定することもできずにいるのである。先日舞台美術家の島次郎氏の話をうかがっていたとき、島氏の、これまで本当に印象に残っている舞台を思い起こしてみると、初期状況劇場の役者たちにせよ、転形劇場にせよ、そこにある身体や表現に、ある「質量」のようなものを感じた作品ばかりが浮かんでくるんだよな、という話を聞き、そこで飛び出した「質量」という言葉に強い説得力を感じた。おそらくその理由のひとつは、8年

前、私が京都に来て以来亡くなる一昨年まで、大学という場所で接してきた太田省吾の発する日常的な言葉や沈黙のひとつ一つに、「質量」という言葉がまさにぴったりくるような印象をずっと抱き続けていたせいである。そして、土方巽の遺された映像やテキストから感じられるものも、やはり一種の「質量」なのである。この「質量」が、私の「1968年」という年号に対するイメージに、別の角度から、別の「異和感」をもたらしてくれる。そして、私にとって新鮮なその「異和感」は、「歴史」という言葉の意味そのものを再考するよう、私を促してくれるのである。

今日、歴史の記憶喪失ということがよく言われる。たとえば「1968年」から40年以上の年月がたった今、ある部分では過去が過去となってしまうのはやむをえないし、だからこそ、これもたとえば小熊英二の社会学的大著である『1968年』などが刊行され、急速に風化しつつある「戦後史」を奪還しようという試みも生まれるのだろう。だが、同時に私が思うのは、「歴史の奪還」というテーマに対する別のアプローチはありえないだろうか、ということである。私は以前、初代全学連委員長として活躍し、やがて吉本隆明とともに『文学者の戦争責任』を書くことになった批評家の武井昭夫氏に、数年前にお会いしたことがある。八十歳をすぎてもなお明晰な知性と左翼的な批判精神を失っていない武井氏は、私にとって、別のタイプの忘れ難い人の出会いだった。ただ、武井氏の印象は、むしろ柔軟で幅広い「奥行き」のようなものを強く感じさせ、それは「質量」という印象とはやや違っていた。もしかすると私は、この二つの印象の対比のなかで、「歴史」を捕まえることができないかと、どこかで願っているのかもしれない。かつて舞踊評論家の市川雅は、土方巽の『疱瘡譚』を評して、「肉体が思想となった」と書いた。だが、つい



第一回土方巽研究会より

第一回研究会

2009年6月20日(土)
京都造形芸術大学映像ホール

★土方作品上映

『夏の嵐』

(出演:土方巽ほか/企画・監督:荒井美三雄)

★公開研究会

第一部 研究報告

1.田中弘二
「『舞踏の欲望』について」

2.國吉和子
「向こう側の目玉について」

3.宇野邦一
「剥がれた体の薄い深渊図」

第二部 ディスカッション

宇野邦一(立教大学教授、フランス文学・思想)

國吉和子(多摩美術大学客員教授、舞踊研究・批評)

田中弘二(土方巽研究)

松田正隆(京都造形芸術大学客員教授、演出・マレピトの会代表)

三浦基(演出・地点代表)

八角聰仁(近畿大学教授、批評)

森山直人(京都造形芸術大学准教授、演劇批評)

山田せつ子(京都造形芸術大学客員教授、コレオグラファー・ダンサー)

★土方巽とは★

1928年秋田県生。舞踊家、振付・演出家。第二次大戦後、日本の現代芸術に大きな影響を与えた「暗黒舞踏」の創始者。秋田県立秋田工業学校卒業後、市内で増村克子(江口隆哉門下)に師事し、ドイツ系の新興舞踊(ノイエ・タンツ)を習得。上京して安藤三子舞踊研究所に入門、26歳でモダンダンサーとして初舞台を踏む。1959年全日本芸術舞踊協会新人公演で発表した『禁色』を機会に、モダンダンスから離脱し、大野一雄らを巻き込み美術家との共同制作を開始。初リサイタルで『種子』『暗体』『処理場』(60)、『あんま』(63)、『バラ色ダンス』(64)、『土方巽と日本人』『肉体の叛乱』(68)など、挑戦的で反社会的な作風をもって1960年代における日本の前衛芸術の担い手の一人となった。その後、『四季のための二十七晩』(72)、『静かな家』(73)など、「燐蟻大踏鑑」を冠した一連の作品を通して独自の方法論を追究した。土方に私淑する者も多く、後に国内外で「舞踏(Butoh)」と呼ばれる潮流の始まりを画した。1974年に弟子の芦川羊子を中心に「白桃房」を結成。アスペクト館にて『ひとがた』『鯨線上の奥方』など、3年間に連続16本の作品を発表。1977年には大野一雄舞踏公演『ラ・アルヘンチーナ頌』を演出するなど、外部に向けた活動を開始。1985年には『東北歌舞伎計画Ⅰ~Ⅳ』の連作をスタジオ200で発表したが、翌86年1月に死去(享年57)。著書に『犬の静脈に嫉妬することから』(76年)、『病める舞姫』(83年)、『遺文集』『美貌の青空』(87年)など。また、黒木和雄監督『日本の悪靈』(70)、大内田圭祐監督『風の景色』(76)、小川紳介監督『1000年刻みの日時計』(85)など、映画出演も多数多い。'98年には著作や舞踏譜を集成した『土方巽全集』全2巻(河出書房新社)が刊行された。

※土方巽は正しくは「巽」です

Information

●本研究会に関する情報やこれまでの研究会の議事録はWEBにてご覧いただけます。

舞台芸術研究センター土方巽研究会

<http://www.k-pac.org/performance/20090620.html>

●研究会の今後の予定

第三回研究会 2010年3月12日(金)~14日(日) 会場:京都造形芸術大学

ゲストスピーカー:宇野邦一(立教大学教授、フランス文学・思想)

赤坂憲雄(東北芸術工科大学大学院長)

稻田奈緒美(舞踊評論・研究)

安藤礼二(多摩美術大学美術学部芸術学科准教授)

三浦基(演出・地点代表)